

分析形而上学におけるイデオロギー概念の再検討

高取正大 (Masahiro Takatori)

慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程

理論のイデオロギーという概念は、こんにちの分析形而上学において、よく知られたアイデアの一つである。この概念は、W. V. O. クワインによって理論の存在論的コミットメントの概念とともに導入されて以降 (Quine (1951))、形而上学理論を評価するための方法論的道具立てとして、広く普及していると言える。

だがその知名度に反し、実際のところこのイデオロギー概念の正確な内実については、満足いく特徴づけがこれまで与えられてきたとは言い難い。(これは特に、理論評価の指標として対をなす存在論的コミットメント概念のほうには多くの考察が蓄積されてきたのと比べて、著しい不均衡だと言える。cf. Fisher (2012).) クワイン自身に由来する、素朴なかたちの特徴づけによれば、ある理論のイデオロギーとは、その理論の(原始的)語彙によって表現可能な概念のことだとされる。しかしながら、この素朴な特徴づけは、現代形而上学におけるイデオロギー概念の利用と照らし合わせたとき、極めて不満足なものでしかないように思われる。近年では、T. サイダーを代表とする多くの形而上学者から、イデオロギー概念の特徴づけに関して次のような方針が支持されつつある (cf. Sider (2011))。すなわち、たんに理論の語彙によって表現可能な概念のことではなく、それらの概念を通じて理論が実在に対して課す、存在論的コミットメントとは異なる種類の形而上学的要請として、理論のイデオロギーに実質的特徴づけを与えようというものである。この方針はイデオロギーの**実在論的解釈**と呼びうるものであり、そのより具体的な内実をどのように精緻化するかということは、こんにちの形而上学方法論において重要な課題だと考えられる。

以上のような背景のもと本発表では、イデオロギー概念の適切な解明がどのようにして与えられるかを、近年のメタ形而上学的考察を踏まえたうえで再検討し、この概念のよりよい理解を得ることを目標とする。より具体的には、主要なトピックとして以下の三つを扱いたい。

- (i) こんにちの形而上学的議論の中で、「イデオロギー」という語の一般的な用語法には、ある種の混乱(もしくはスロッピーさ)が見られることを指摘する。この語で呼ばれるアイデアの少なくとも一部は、近年 J. R. G. ウィリアムズらによって導入された〈実在要請 (reality-requirement)〉の概念 (cf. Williams (2012)) を通じて理解するのが、適当であると論じる。
- (ii) イデオロギー概念の解明として、大まかに次のような提案を行いたい。すなわち、(プロパーないみでの)理論のイデオロギーとは、その理論の文の真偽を評価する際に前提とされるような、意味論的枠組みのことであると捉えるのがもっともらしい。
- (iii) イデオロギー概念については一般に、次のような特徴が成り立つとよく言わ

れる。つまり、「イデオロギーは理論評価の際の指標として、存在論的コミットメントと対になる概念である」とか「理論のイデオロギーと存在論的コミットメントはトレードオフの関係にある」といったものである。(i) および (ii) における発表者の提案を採用したとき、イデオロギー概念のこれらの特徴がどのように理解されるかを説明する。特に、上述したイデオロギー概念の素朴な特徴づけに比べて発表者の提案を採用するほうが、こういった特徴をよりよく理解できるようになることを示したい。

参考文献

- Fisher, A. R. J. (2012), *Ideology, Truthmaking and Fundamentality*. Ph.D. dissertation, Syracuse University.
- Quine, W. V. O. (1951), “Ontology and Ideology”, *Philosophical Studies* 2: 11—15.
- Sider, T. (2011), *Writing the Book of the World*. Oxford: Oxford University Press.
- Williams, J. R. G. (2012), “Requirements on Reality”, in Correia, F. & Schnieder, B. (eds.) (2012), *Metaphysical Grounding*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 165—185.